eco生活事始め　見どころ解説 ―第６回　古墳時代―

古墳時代は、朝鮮半島からの鉄器づくりや須恵器の生産などの新たな技術の導入によって、大量に道具類が確保できる社会となりました。縄文時代のように、土器を修理して再利用することがほとんど見られない状況などからは、「消費型社会」ということができるかもしれません。ただ、不用となった土器や木製品などを他の用途に転用する例は比較的多く見られ、その点では、道具類の再資源化という意識は存在していたと考えられます。以下で、転用（Recycle）された資源の例を紹介します。

土師器甕転用砥石
（東金市久我台遺跡）

砥石は、旧石器時代以降さまざまな道具を研磨するために使われていますが、専用の砥石は現在と同様、石製と考えられます。その一方で、破片となった土器を砥石に転用している例が縄文時代以降見られるようになります。土器は、収縮や亀裂などを防ぐために、素材となる粘土の中に砂などを混和剤として含んでいるため、それが研磨剤の役割を果たすようです。特に、古墳時代には、鉄器の使用が広まるとともに、刃を研いだりするための砥石の確保が必要となってきました。石製の砥石はそれほど多くなく、むしろ、土師器や須恵器の破片を転用した例が多くなっています。近くにある壊れた土器を有効活用した面白い事例となっています。

古墳時代には、建物の部材を転用する例が見られます。木の加工には、多くの技術や労働力が必要であるため、新たな資材を作り出すよりも身の回りにある不用となった部材を利用した方がより効率的と考えていたようです。印西市**西根**（にしね）**遺跡**では、水の流れを調節するための古墳時代前期（約 1,700 年前）の**堰**（せき）が発見されました。この堰は、向きを変えられる可動堰であった可能性が高く、人為的に掘削された細い水路に水を流し、水田に水を供給するための重要な施設と考えられます。川床に斜めに杭等を打ち込んだ後に横木をかませた「合掌型（がっしょうがた）」の構造に近い堰で、建築部材の廃材を多く転用している点に特徴があります。その中には、高床倉庫に使われたと思われる**梯子**（はしご）が含まれています。西根遺跡の周辺には、古墳時代前期の集落が多く所在しており、それらの集落から持ち込まれた廃材を堰の部材として転用していたのでしょう。

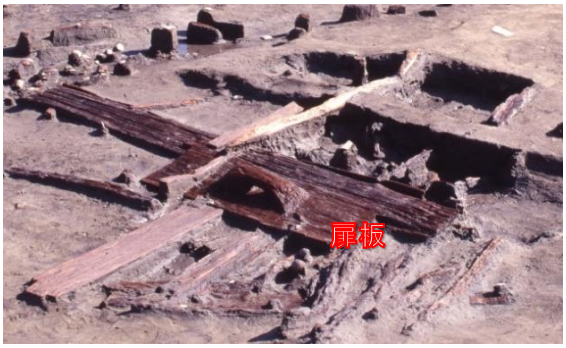
流路・水路と堰（印西市西根遺跡）

梯子の出土状況

堰

他に建築部材を転用した例として、館山市**長須賀条里制遺跡**から見つかった古墳時代中期（約 1,600 年前）の木樋があげられます。この木樋は東側で水路と接しており、西側に接する同時期の水田に水を引くための導水施設と考えられます。木樋本体は、木をくり抜いて加工された専用品ですが、それを補強する部材として建築廃材が転用されていました。木樋の上には蓋板が被せられ、その上にほぞ孔のある建築部材が木樋と直交するように載せられ、さらにその上に木樋と同方向に**扉板**が置かれていました。扉板は両開き扉の片側で、上下に扉軸が削り出されて、中央には閂を差し込むための受けが取り付けられています。厚さ１㎝ほどとかなり薄くなっているため、転用にあたって剥がされた可能性も考えられます。この扉板は、高床倉庫の扉と思われ、近くの倉庫を伴った集落から持ち込まれたものでしょう。西根遺跡の梯子や長須賀条里制遺跡の扉板とも全体の形が分かるものはきわめて少なく、見応えのある資料となっていますので、この機会に是非ご覧になって下さい。

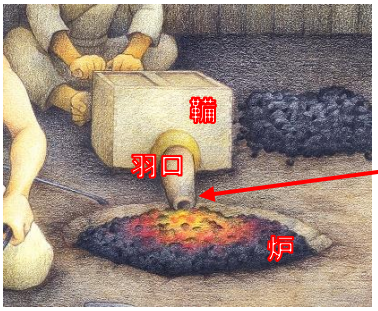
水路と木樋（館山市長須賀条里制遺跡）



木樋と扉板

古墳時代の転用例として今回展示で紹介したものに、**高杯転用羽口**があります。房総では、古墳時代前期に鉄器づくりの鍛冶を伴う集落が出現していますが、きわめて単発的で実態はよく分かっていません。そのようすが具体的に分かってくるのは古墳時代中期になってからです。**四街道市小屋ノ内遺跡**では、工房と思われる竪穴住居跡内から鉄器づくりに関係する鍛冶炉跡が見つかっており、炉の肩部には、逆さになった高杯の脚部が出土しています。脚の上部には、鉄滓あるいは溶解した発砲ガラス質の付着物が見られ、この部分がかなりの高温を受けています。この状況から、高杯の脚部は羽口として転用されたことが明らかとなっています。羽口は、火力を強めるための風を生み出す鞴と鉄を溶かす炉をつなぐ送風管の役割を果たしています。この時期、専用の羽口はほとんどなく、高杯の脚部を転用する例が多いという特徴があります。簡単な構造の鍛冶による鉄器づくりを行う集団の中に、身の回りにある不用となった高杯の脚部を羽口の代用品として転用するという共通意識が存在していたのでしょう。

鍛冶炉（四街道市小屋ノ内遺跡）



鍛冶想定図（『図解 八街の歴史』より）

高杯転用羽口

裁断された鉄器の断片

また、鍛冶炉のある竪穴住居跡からは、鉄器の断片がたくさん見つかっています。おそらく、徹底的に使い込んで使用不能となった鉄器を細かく裁断した後に、炉内で溶かし新たな鉄器を再生していたのではないでしょうか。限られた資源を有効活用するために、繰り返し再生することが図れていたことを示しています。